

# 福州大学日本語系における カリキュラムデザインに関する研究

国際文化研究科 国際文化専攻  
国際文化研究分野 博士前期課程1年

**王嘉琨**

担当教員 酒井順一郎

## 研究背景

周知のとおり、急速なグローバル化の中、国際間のコミュニケーション力の重要性はますます高まっている。中国国内における外国語教育は依然重視されており、特に日本語教育は盛んであり、学校教育及び民間の日本語教育機関は数多い。その背景として、密接な日中間の経済関係の、日本の「留学生30万人計画」、大学受験科目における日本語の有利性などが考えられる。しかし、日本語教育の学習効果について問題がないわけではない。特に大学のカリキュラムに関しては教育部が作成した所謂「教学大綱」通りに行っているかは疑問である。本研究はこれに着目し、中国の中都市にある福州大学日本語系に着目しそこでの日本語教育のカリキュラム構成、教育実態を明らかにし考察する。

## 研究目的

本研究は、福州大学における日本語教育のカリキュラムデザインと教育実態を明らかにし、両者がどのように影響し合い機能しているのかを検証し、さらにより高い日本語教育の学習効果を上げるためのカリキュラムデザインを考察する。尚、福州大学は福建省と教育部が共同管理する国家「211プロジェクト」に指定された大学である。

## 研究概要

修剛「新時代中国専門日本語教育の転形と発展」(『日語学習と研究』2018年)によると、中国における日本語教育は学生中心の教育という教育理念はまだ成り立っていないと指摘している。つまり、主に課程が単調で、教育方法も古く学生に単語と文脈の読解能力の育成が重視され、その一方で、会話力と異文化理解能力については十分に配慮されておらず、所謂「教学大綱」通りに実施しているとはいえない。また、学習意欲の問題も無視できない。大学で日本語を学ぶ学生たちの中には、第一志望として日本語を選んではいない者も多い。そして、語学学習の効果は人それぞれであり、その効果が表れる時期も不明である。残念ながら、学生の視点から興味を呼び起こす授業や教室外での日本語教育関係のイベントが少なく、日本語に対する関心の向上が十分に上がらない。したがって、学生たちは日本語学習に対する意欲は高くない。これは福州大学でも顕著に表れている。

徐燕「中国の大学における日本語教育の現状と課題 -日本語学習者、教育実践者、研究者としての視点から-」(『専門日本語教育研究』18巻2016年)によれば、日本語学習者が日本語の使用に対する消極的な態度を有していると分析している。また、筆者(本報告者: 王嘉琨)の福州大学での調査によると、日本への留学を含めて、日本語と関係がある仕事をしている卒業生は半数にも満たない。前述の学習意欲とも関係があるが、卒業する時点の就職状況との関係性も着目すべきである。より効果的な日本語教育を提供する上で出口戦略を考える必要がある。

## 成果・まとめ

所謂「教学大綱」に教育現場が十分に対応できていないことは問題である。この背景は一体何であるかは今後の調査から判断したい。また、学生の学習意欲をいかに高めることが重要であり、特に卒業時の出口戦略との関係を考えなければならない。コロナ禍で思うように現地での調査ができていないが、今後は、引き続き調査を行い、これらの課題と改善点について考察したい



## 指導教員コメント

世界一の日本語教育大国の所謂「教学大綱」を分析し、地方都市の福州大学に着目し、そのカリキュラムデザインや教育実態とも関係を検証することは興味深い。また、学習意欲、出口戦略に言及したことは評価できる。コロナ禍で思うように調査できなかった点は残念であるが、今後の調査に期待したい。

酒井順一郎